

## シモーヌ・ヴェーユの三作品における精神的能力と感受性

村 上 吉 男

私は、シモーヌ・ヴェーユ（1909年—1943年）の学士論文『デカルトにおける科学と知覚』（1930年）と『哲学講義』（1933年—1934年）を前号の拙論<sup>1)</sup>に取り上げ、そこに心身論的な視点を持ち込んでみた。したがって、この視点は当然、彼女の全作品を考察する場合にも確保される必要があると思うが、今回はとりあえず、それらの二作品に、『自由と社会的抑圧との諸原因についての考察』（1934年）と題される論文を加えて、私が心身論的な視点を主張し続けることができるか否か答えるところまでみることにする。

ところで、心身論的な視点を私に予想させる契機になったり、その考察対象を三作品にしぼったりするには、それなりの理由があるからなのである。ひとつに、これらの作品にも、あるいは、ほかの主な作品を一瞥するだけでも、精神的・身体的な現象、いかえると、心理的・生理的な現象を記す文章や単語が、意外に数多く散見するし<sup>2)</sup>、さらに、シモーヌ・ヴェーユの工場体験（1934年12月4日—1935年8月9日）を境にしたその前後の諸作品における、それらの文章や単語の使われ方に特徴を見出せると私は思うからである。彼女の主要な諸作品のうちでも、この工場体験以前の心身論的な問題が提出されているとみられる作品といえば、『デカルトにおける科学と知覚』、『哲学講義』、『自由と社会的抑圧との諸原因についての考察』が該当してくる。そこでは確かに、生理的な単語より心理的な単語の使用頻度が高い。逆に、工場体験後の諸作品では生理的な単語の方が圧倒的に多いのである。それが特徴になっているのだ。

しかし、その特徴を浮かび上がらせる原因の究明を今回前面に打ち出すつもりはない。私にとって、心身論的な視点をさらに掘り下げることの方が、目下の解決を要する緊急課題としてあるのだから。そこで、心身論的な視点を『自由と社会的抑圧との諸原因についての考察』に持ち込んでも、その視点が失われないことを後述の本文理解に委ね、何はともあれ、心身論的な視点で次に問題となるはずなのは、この心身論的な

視点に、前段で述べた心理的・生理的な単語がどうしてかかわるのかということであろう。心身論的な視点とは、心身を合一させて人間を捉えるところにあるといえよう。心はむろん、精神的な現象、それゆえ心理的な現象を表わし、身はまた、身体的な現象、それゆえ生理的な現象を表わすのである。ただし、心身を合一させるとは、精神的（心理的）な現象や身体的（生理的）な現象が個別に人間に生じたり、両方の現象が同時に人間にひきおこされたりすることでいわれるのでは決してなく、精神的（心理的）な現象が身体的（生理的）な現象に関係したり、身体的（生理的）な現象が精神的（心理的）な現象に関係することにある。いかえると、心理的な現象はそれだけにとどまるのではなく、生理的な現象の生起に影響を及ぼすこと、一方では、生理的な現象はそれだけにとどまるのではなく、心理的な現象の生起に影響を及ぼすことが含まれて心身合一とみなされるわけである。そして、この見方は、シモーヌ・ヴェーユに通じてくるように思われる。彼女はいう。

[A]

- (1) 感性と生理的な事実とのあいだには結びつきがある。…人生のおりおりにおこる生理的な変化が、とくに感性をとおしてあらわれることは確かだ<sup>3)</sup>。
- (2) 激しい情動はすべて、身体的な現象を伴う<sup>4)</sup>。
- (3) 身体的な表示は精神的な情動のあらわれであるとも、身体的な表示が感性そのものを構成するともいい得る<sup>5)</sup>。

[B]

- (1) 精神に対する身体の影響を考えてみよう<sup>6)</sup>。

(2) 認識一般においては、外見は感性をとおしてもたらされ、人は推論によって、外見の背後にあるものを見出す必要がある。しかし、美においては、人は外見の背後にあるものを直接捉える。(たとえば、理解するために、音節数を数えねばならない詩句は美しくない。) 建築における諸関係はほぼ感性をとおして捉えられる。音楽のリズムについても同様である<sup>7)</sup>。

心理的な現象が生理的な現象の生起に影響を及ぼすことに該当するのは、上記の引用文群の〔A〕である。それゆえ、〔A〕は精神から身体に関与させる内容をもった文章になる(ただし、〔A〕の(3)の後文、すなわち、〈身体的な表示が感性そのものを構成する〉は、ウィリアム・ジェームズの情動説に従うかのような発言である。その説とは、前号で紹介した〈悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しい〉に代表されるものである。そして、このうちの〈泣くから悲しい〉が、〈身体的な表示が感性そのものを構成する〉に相当してくる。本文以下でここに使用される感性が何か判明すれば、この句自体は〔A〕の他と同様に取り扱われるが、他方、〈身体的な表示〉を優先させ考えることの理解において、それは〔B〕に分類されるべきことをも意味させるのだ。この句に関してはのちに説明するはずである)。それゆえ、精神から身体に関与させることは、心理的な単語によって表現されるとみなし得る。一方、生理的な現象が心理的な現象の生起に影響を及ぼすことに該当するのは、上記〔B〕の引用文である。それゆえ、〔B〕は身体から精神に関与させる内容をもった文章になる。それゆえ、身体から精神に関与させることは、生理的な単語によって表現されるとみなし得る。

こうした心理的な単語や生理的な単語は、人間の諸能力をあらわしてくる。その能力のひとつに、引用文〔A〕〔B〕にみられる感性がある。しかし、〔A〕〔B〕に分類したにもかかわらず、感性がそれらに共通して使われるのはどういうことなのか。感性は最終的訳語ではない。この感性に相当するフランス語は、*sentiment* (あるいは *affection*)、*sensibilité* である。そして、〔A〕の引用文の感性には、*sentiment*、〔B〕の引用文の感性には、*sensibilité* が用いられる。それゆえ、〔A〕と〔B〕なる分類が可能になっ

たということが出来る。ところで、*sentiment*、*affection* は感情とも、また、*sensibilité* は感受性とも訳すことが可能なはずである。そうすると、*sentiment*、*affection* が一方で感性、他方で感情といわれ、あるいは、*sensibilité* が一方で感性、他方で感受性といわれる訳語を、どのように理解しておくのが問題になる。まず、後者、すなわち、*sensibilité* において、感性や感受性の訳語が可能なのは、それだけ *sensibilité* の多様な働き方があるという証にもなるといえるのだ(そのことは順次、語るつもりでいる)。したがって、感性ならびに感受性は、それぞれ異なった能力だということである。しかし、〔B〕の引用文では、感性のみが問われているとみることが出来る。そうであれば、ひとまず、もう一方の訳語である感受性と区別しておく必要が生じるというわけだ(この感受性こそ、まさしく、生理的な現象を生起させ、心理的な現象にも影響を及ぼすのに一番ふさわしい能力であり、とくに、身体内部と関係してくるように思われる)。その〔B〕の引用文中の感性は、〔B〕の分類に見出されるかぎり、身体から精神に関与させる能力になる。そして、身体から精神に関与させる感性には〔A〕の(3)の後文の内容も当然含まれる。たとえば、あなたは感受性が強い(鋭い)と私にいわれることがあるとしよう(私にとっては感性が鋭いということにしかならないのだが)。こうした表現が可能になるには、ある環境が必要となるはずだ。それはおそらく、人が現在の瞬間の外部的な印象を受け入れ得る環境にいるということであろう。それでは、何が現在の瞬間の外部的な印象を受け取るのか。まずは身体である。それも、身体内部に位置しない部分であるし、視聴覚の感覚というだけでは済まないように思われる。肌で感じてしまうような身体から生み出される能力が *sensibilité* (感性) とみなすことも可能になってくる。そして、この感性が今度は精神に関与させられる場合、身体に生じた感性は精神に伝わり、そこで感情 (*sentiment*) と感性 (*sensibilité*) をつくることにかかわるのである。感情が精神で生み出されるとは、既出引用文〔A〕の(3)の、〈身体的な表示が感情(感性)そのものを構成する〉が明らかになし得よう。また、感性が精神で生み出されるとは、〔B〕の(2)のように、身体に生じる感性が精神にそのまま伝わるということである。なぜ、身体に生じる感性が精神において感情や感性になるのか。〔A〕の(3)で、精神における感情となるのは、

まさか精神で身体的な表示ができるわけではないからである。いいかえると、身体的な表示なる手振りや身振り、また、泣くという身体に生じる感性が、精神における感性のように、そのまま伝わるのであれば、精神自体が手振りや身振りをし、泣かなければならないということになる。こんな奇妙で不可能なことはあるはずがない。他方、精神における感性となるのは、感受性（感性）が強い（鋭い）といったことを想起すれば、理解し得るのだ。それは、あなたの身体をさして私がこのように表現したのではなく、あなたの精神が身体に生じた感性をそのまま受け取るように作用させられた結果にすぎないからである。しかし、精神における感性も、手振り身振りをしないのか、また泣かないのか。むしろ、そのとおりなのである。なぜなら、〈身体的な表示が感情そのものを構成する〉のであって、〈身体的な表示が感性そのものを構成する〉のでは絶対ないからである（それでは、先に〈身体的な表示が感性（感情）そのものを構成する〉と私が併記を可能にしたのはなぜかここに問われてこようが、そのことについては、本文以下でみることにする。）そうすると、精神における感情や感性は次のような傾向を帯びたものにしかならないはずである。感性の方は、身体に生じる感性がそのまま伝えられる以上、身体的な因子（引用文〔B〕の(2)の美への感動・驚異を感じる前の身震い）が精神内の感性として伝わるのではないか。感情の方は、その身体的な因子（美への感動・驚異以前や泣くこと）なる感性が精神内の何らかの表象と混合させられた結果、新しく表出される像をさすのでないか。ただし、精神における感情と感性がそれぞれ、新しく表出される像、そのまま伝えられるものになろうとも、その感情や感性には、これらが精神に生起してくるといふ共通点があることを確認する必要がある。つまり、それは、身体が現在の瞬間の外部的な印象をそれ自身で刺激として受けとめて（身体に生じる感性）、その刺激と反射がもつぱら精神機能に委ねられる（この反射の仕方では感情と感性になり得る）ということである。したがって、このような身体に生じる感性（sensibilité）はおよそ、心理的な現象を生起させることにかかわらせ得るといってよいのである。

次に、sentiment、心理学用語によく使用される affection においては、感情の訳語を当てることがふつうである。この感情は、前段で記した、身体に生じ

る感性を出発点にして精神に生起する感情を意味させるのでは決してない。それでは、これはどんな感情なのか。引用文〔A〕の(1)の理解によって（ここには、sentiment のみが用いられる）、この感情は、すでに語っているように、心理的な現象が生理的な現象の生起に影響を及ぼすことを示唆し、結局、精神から身体に関与させる能力になるということである。つまり、感情は、はじめから精神で刺激され、そこで反射されて、それが身体に伝わるというのが、ここにいわれる感情なのである。したがって、このような感情は、感情しかつくり得ないといえるのである。さて、〔A〕の感情さえ感性と表記したのはなぜか今立ち戻る必要がある。そうだとすると、二機に取れる〔A〕の(3)の後文を除き考えると、こんな理由は適当といえないだろう。すなわち、sentiment、affection のどちらにも感情ではなく、感性なる訳語を〔A〕に記したのは〔B〕と言葉上で統一することができるからだ。それではいかなる意味も見出せない。それより、この理由は、感情の訳語で〔A〕〔B〕を統一するとすると、身体に生じる能力の事項〔B〕が完全に無視されるがそれを避けるところに、また、感情が純粋に精神機能に因る能力であり、心理的な現象を生起させるとしても、この心理的な現象に関係する能力は感情だけではないという点に求められるのである。身体に生じる能力の感性も刺激また反射においては精神機能に与る。つまり、感情と同様、感性は心理的な現象に関係してくる。したがって、〔A〕の感情よりも〔B〕の感性に照準を定めるべきは当然のことなのである。それにこうした感情を感性なる訳語に置換させたのは、前段でのこの感性が感情を構成することができたからである。感性を基準にしても感情と二つの共通点が見出せるおかげで、私はその両方を一応、感性という同一の訳語に統一し得たのだということが可能になるのである。前号の作図（とくに図4と図5）に付した説明をみてもわかるように、私はそうした意図のもとに、この感性なる語を使用したのである（そして、なおもその都度、感性が sentiment（感情）になるか、あるいは、sensibilité（感性ないしは感受性）をさすか、完全とはいかないまでも、指摘することを怠らないように注意したはずである）。ところで sensibilité なるものには、多様な作用があると述べておいたのだが、実は、シモーヌ・ヴェーユのみるところに従えば、今記したばかりの感性と感受性のほかに、もうひとつ、

感性（それは後述する受動的感性のことである）と名付けられた能力があるとされる。しかしながら、これまで語ってきた感性と、ほかの作用をなしていわゆる、もうひとつの感性や感受性とが、当然その数だけの異なる働きをすることになるとしても（もうひとつの感性と感受性の働きがそれぞれ異なることも、のちに詳しく説明する）、ここでは、これまで語ってきた sensibilité（感性）と sentiment や affection（感性＝感情）についての相違が何であるかを整理しておくだけで十分なのである。この純粋に精神機能のみに因る能力である感情（sentiment や affection）は、それゆえその発生部位において、感性（sensibilité）における感情（sentiment）とは異なるが、その働きは後者の感情の知覚での作用と同様に捉えてかまわないように思われる。そうはいつても、その純粋に精神機能のみに因る能力の感情の作用することを取り上げ、さらに、感性と対比させて、それらの相違をみる時間を惜しんではいないだろう。あらゆる表象が混合されるところにかかわるのが感情（sentiment や affection）なのだと言っている（註16参照）。表象が混合される精神は知覚である。表象とは、現在の瞬間なる外部的な印象に囚われない現象をもって、知覚に描く像のことをいうから、その何らかの像が表出されることによって感情とみなされるのである。それゆえ、こうした感情は、発生部位としての身体に少しも関与しないのだ。以上はこの感情が意味することである。次に、そのことを感性に対比させてみる。感性は、身体が現在の瞬間なる外部的な印象をそれ自身で刺激として受けとめて、その刺激また反射がもつたら精神機能に委ねられるところに見出された能力である。それゆえ、こうした感性は、発生部位としての身体に大いに関与するのである。そうであるならば、つまり、このように内容が異なるかぎり、感性と感情とは、厳密を期すためにはこれから以後、明らかに区別されて取り扱われねばならないだろうし、前段とともに、この長い段落の最後でもかく結語しておく必要があることは、感情（sentiment や affection）が心理的な単語に必ず対応し、感性（sensibilité）が心理的な単語（感情と感性とも）と同時に、発生部位としての身体にかかわる要因をも担っていることを含めていえば、生理的な単語に対応するといつても間違いがないということである。

以上から、(I)『デカルトにおける科学と知覚』、

(II)『哲学講義』、(III)『自由と社会的抑圧との諸原因についての考察』の三作品に用いられる多くの単語は、心理的な単語である（生理的な単語は、これら三作品におけるかぎり、そして、今まで語ったものでみるかぎり、極めて少ない。使われる場合があるとしても、それは、発生部位としての身体にかかわる感性だけである。そこには感受性の意味はないし、それどころか、感受性はまったく出ていないといつてもかまわない。ちなみに、その感性の単語が、(I)には4回<sup>9)</sup>、(II)には7回<sup>9)</sup>使用されてはいるが、(III)には一度も見当たらない。この心理的な単語は、繰返すが、人間の精神的な諸能力を示唆する。三作品でシモーヌ・ヴェーユが取り上げる主な精神的な諸能力には、すでに見したところの感情、また心理的な単語に対応する感性のほか、思惟、想像、記憶、意志、欲望、夢想、感覚、情動、情念などがある。そして、何より注意すべきは、ここに列挙された諸能力は、必ず思惟とかかわって捉えられると彼女がみていることなのだ（このことは思惟の方からもいえる。つまり、思惟がそれ以外の単数か複数かの能力を取り込んで成立する場合もあるということである）。まず、思惟以外の諸能力がいかに思惟と関係しているかの引用文を掲げておこう。

わたしが欲望、情念、感覚、夢想を思惟しないかぎり、わたしの存在は許されない<sup>10)</sup>。

感覚と想像が共同でわたしのうちに産み出す思惟<sup>11)</sup>。

知覚における記憶の役割を説くことは、対象が今ひきおこす反射を過去の反射に結びつけるときへのだたりのせいで、想像の役割を説くことになら<sup>12)</sup>。

わたしは思惟することを意志するがゆえに思惟し、意志（作用）がわたしの存在理由である<sup>13)</sup>。

夢想、欲望、情動、……は、わたしの意志（作用）のみであるべきだ<sup>14)</sup>。

意志は推論にもとづく思惟と、思惟が事実を決定するという意味での事実とのあいだの関係であ

る<sup>15)</sup>。

思惟はまず、あらゆる表象が混合される感情に  
取りかかり、その表象を区分する。…思惟は概し  
て、まず感情からはじめるときにしか実らない<sup>16)</sup>。

思惟との関係における感情の価値。感情は思惟  
を決して休止させない。感情は思惟に浄化的な行  
動をとるように仕向ける<sup>17)</sup>。

次に、思惟がそれ以外の諸能力を自らに取り込む場  
合はどうか。このことは前号において、すでにみ  
たとおりだが、およそ、次のような内容である。すな  
わち、この場合、知覚で形成される思惟は、シモーヌ  
・ヴェーユによれば、感覚、感情、感性、ならびに想  
像を取り込んで、〈悟性によって導かれる想像〉、〈欺  
瞞的想像〉、〈受動的感性〉という思惟になったのであ  
る（私は、精神が映し取り部分と知覚部分とで構成さ  
れているとみなした。したがって、感覚、感情、感性  
は前者に刺激される能力であり、想像は前者で刺激さ  
れた能力を知覚で反射させたり、また、後者でそこ  
における記憶を想像として反射させる能力であるとい  
える。知覚は反射を生じさせる部分になることはいま  
でもない）。そして、このなかに、問題にするところ  
のもうひとつの感性が見出されてくる。それが受動的  
感性 (sensibilité passive)<sup>18)</sup>なる思惟である。この受  
動的感性はその成立因子にあって、精神内の映し取り  
部分に刺激された感性を欠かせないものにする。いい  
かえると、受動的感性は、知覚における思惟が感性的  
要素を取り込む能力なのだ。そうすると、感性が思惟  
に捕えられてどれほど思惟に影響を与えるかわから  
ないにしても、ここで明らかにされることは、身体に生  
じる感性が感性として精神（映し取り部分）に伝わる  
ということである。このことによって、当然、その精  
神に感性という能力が刺激されることが明白になる  
（またこのことから、この感性が他の能力とは結びつ  
かずに、あたかも独立した感性となって、知覚部分で  
反射される場合のことを確認できるわけだ。先に、身  
体に生じる感性が精神にそのまま伝えられるとみてお  
いた感性がそうなのであり、このことはさらにのちに  
語るところである）。とすれば、こうして受動的感性  
という思惟があることにおいて、感性が心理的な単語  
に対応すると記したことは、間違いではなかったとい

えるのである。受動的感性（なる思惟）自体は心理的  
な単語に対応するのはいうまでもない。

ところが、シモーヌ・ヴェーユは、思惟とかわる  
諸能力、思惟が取り込む諸能力は、精神に生起する  
から、むしろ、心理的な単語として捉えることに疑問を  
もたぬだろうが、一方で、私がいうところの精神から  
身体に関与させる能力にはなり得ないということを指  
摘しているのである。次の引用文は、まさにそのこと  
を語るであろう。

生ける身体の反射は、ときには、思惟とは完全  
に無関係である。それは、ときには、まれに、思  
惟の命令をたんに実行する。より多くの場合、生  
ける身体の反射は、精神が欲したことを、精神が  
そこにまったく参加することなしに遂行する。ま  
た、それは精神によってつくられた意向に、少し  
も照応することなしに随伴する。さらにまた、生  
ける身体の反射は思惟に先行することがある（傍  
点筆者）<sup>19)</sup>。

欲する (désirer) ことや意向または願望 (vœux)  
と訳した傍点箇所における精神 (âme) は、諸能力が  
思惟とかかわる精神であり、その際、このように感情  
が意味される精神 (âme) だから、たとえば、感情的  
因子が混入された思惟になると理解すれば、思惟とか  
かわる感情は、身体に関与しないということなのだ。  
それはまた、思惟が取り込む諸能力にもいえよう。つ  
まり、〈悟性によって導かれる想像〉、〈欺瞞的想像〉、  
〈受動的感性〉という思惟の想像や感性的因子でさえ、  
思惟と関係してくるかぎり、身体に関与しないとい  
うことになるのである。これは当然、どんな思惟にでも  
当てはまってくる。なぜなら彼女は身体は〈思惟とは  
完全に無関係である〉とみていたからである。そうす  
ると、私の見方、すなわち、思惟を含めた諸能力（心  
理的な単語）は、精神から身体に関与させるというこ  
とが該当しなくなるのか。決してそうではないのだ。  
というのは、思惟とかかわらない、たとえば感情的思  
惟にならない、いわば独立した感情、あるいは、思惟  
に取り込まれない、たとえば〈受動的感性〉なる思惟  
にならない、いわば独立した感性があるからなのだ。  
そうであれば、この独立した感情こそが、はじめから  
精神の映し取り部分で刺激され、その知覚部分で反射  
（反応）されて、身体に伝わるのであり、この独立し

た感性こそが、たとえ身体に生じる感性であっても、とにかくそれが精神の映し取り部分に刺激されるのだから、知覚部分において思惟に取り込まれずに、そのまま反射されることもあり得るのである（感受性（感性）が強い（鋭い）という表現は、この場合をいうのではなかろうか）。しかし先の感情とは相違して、この感性は身体に伝わらず、知覚にとどまる。それゆえ精神から身体に関与させ得る能力は何かということであれば、それは、感情でしかないとみることができよう。繰返すが、感情が、心理的な現象となって、さらに、生理的な現象の生起に影響を及ぼす当の能力なのだ。いいかえると、この感情が、精神と身体とを結びつけさせ、人間を心身合一させる一方の能力になるということである。そしてここに、「シモーヌ・ヴェーユの三作品における精神的能力と感受性」というタイトルの可能になった事情があるというわけである。つまり、このタイトルのなかの「精神的能力」とは、すでに記したごとく、多々数え上げられてこようが、ここでは、感情を意味するだけであって、それ以外のどんな能力も該当させることができないのである。しかし、何ゆえ、その感情だけがここで問われてこなければならないのか。それはいうまでもなく、心身論的な視点をもって、いかなる能力が精神と身体とを関係づけさせるのか探ろうとしていたからである。

それゆえ、この心身論的な視点において、同タイトルには、感受性 (sensibilité) なる能力がまた絶対に不可欠になったのである。私のいうこの感受性は身体内部（内臓など）にかかわっている能力である。したがって、ここでは、sensibilité（感性）が知覚部分において、感情を構成したり、または感性になったりする能力をさすのでは決してないのだ（感情はさらに身体にかかわり、感性はそれが知覚にそのまま残る能力になる）。この感受性をタイトルに記すことによって、感受性を身体に生起する能力とみなし、感受性が、生理的な現象となって、さらに、心理的な現象の生起に影響を及ぼす面を、私は考察しようと思っているのである。つまり、この感受性が、身体と精神とを結びつけさせ、人間を心身合一させるもう一方の能力になっているということだ。そのように捉えることではじめて、心理的な現象が生理的な現象に関係したり（精神から身体に関与させること）、生理的な現象が心理的な現象に関係する（身体から精神に関与させること）、完全無欠な心身論が成り立つのである<sup>20</sup>。一方の見方

が欠ける心身合一では不十分な心身論を問うことではなくなるのだ。それゆえ、それらの見方を補う能力こそ、人間の感情や感受性になり、心身はこうした感情や感受性なしに合一されないといえるのである。しかしながら、ここで身体から精神に関与させ得る内容をもつ感受性に関していえば、前述もしたことだが、そうした単語は三作品には見当たらなかったのだ。つまり、それらの作品には心理的な単語は多く数えられそれに比して少ない生理的な単語があっても、感受性なる単語にかぎれば、出てこないということである。

確かに、工場体験以前のこれらの作品には心理的な単語が多い。なかでも、圧倒的だといえる単語は思惟である（たとえば、(I)『デカルトにおける科学と知覚』には130前後<sup>21</sup>、(II)『哲学講義』には190前後<sup>22</sup>、(III)『自由と社会的抑圧との諸原因についての考察』には110前後<sup>23</sup>の *pensée* の単語が使われている）。とくに、(III)にあって、思惟はかなり強調されて用いられる。シモーヌ・ヴェーユは、ここで、思惟が身体とは無関係であること（註19参照）の言をむろん固守しつつも、それでもなお、その思惟に大きな期待を寄せているかのようにみえるのである。したがって、彼女が思惟にどんな期待を寄せたか、あるいは、思惟が提起する問題を至急に解くことが課せられてくるが、しかし、私はこの拙論を心身論的な視点にしばって展開させているので、ここにはそれとかかわる若干の問題を扱うだけにして、思惟そのものを主にみることは別の機会に譲らねばならないのだ。それはともかく、まずはその思惟について、彼女は次のようにいうのである。

思惟においては、個人は比類なく集団に勝る<sup>24</sup>。

人間は思惟の行為によって、各瞬間ごとに、彼自身の存在の条件をつくり上げるだろう<sup>25</sup>。

真の自由とは、欲望と充足との関係によるのではなく、思惟と行動との関係によって定義される<sup>26</sup>。

個人の思惟と行動の能力が大きいほど、それだけ、彼の生活は非人間的にはならないだろう<sup>27</sup>。

人間は、もしも彼のすべての行為が、彼の思惟

以外の他の原因、すなわち、身体の非理性的な反射や他人の思惟から生じたならば、完全に奴隷であるだろう<sup>28)</sup>。

社会は、人間が思惟することを社会が必要とする瞬間から、今度はいくらか人間に依存することになる。というのは、それ以外のすべては、身体の運動を含めて、力によって外部から押しつけられることができるが、世界の何物も、人間に思惟の能力の行使を強制したり、人間から彼自身の思惟の統御を取り上げたりすることができないからである<sup>29)</sup>。

人間は、神学者たちの神のように、彼自身の存在の直接の作者であることを許されていない局限された存在である。しかし、人間は、彼に存在することを可能にする物質的な諸条件が、彼の筋肉の努力を指揮する彼の思惟だけの作品であったならば、この神の能力の人間の等価物を所有することになるだろう。このようなのが、真の自由であるだろう<sup>30)</sup>。

これらはすべて、(Ⅲ)から引用した文章である。こうした引用文は、(Ⅱ)の心理学的な立場で語られるような思惟、たとえば「いかなる思惟もつねに全体のなかから明確な物を引き出すことによって成立する<sup>31)</sup>」などの一面を除いてみるなら、「思惟は手段として役立ち、能動的であるかぎりでしか何物でもない<sup>32)</sup>」といわれ、(Ⅰ)の哲学的論文にみる思惟の場合も、「わたしの思惟こそが、わたし自身の現存在、世界の現存在を保証してきた<sup>33)</sup>」と語られる、この(Ⅰ)と(Ⅱ)の見解の延長線上にあるものと捉えてよい。したがって、シモーヌ・ヴェーユが思惟にどんな期待を寄せたかを、これら(Ⅰ)(Ⅱ)の引用文で整理するならば、それは、他人、世界(社会)に対する思惟の能動的作用によって、人間(個人)の存在を確実なものにさせようとするところに見出されてくる。その現実的試み(投企)が可能になってはじめて真の自由が個人に勝ち取られるのだ。しかし、この投企をなすに当たって、思惟を優先させること自体が、思惟の本質を見極めていた彼女(註19参照)を矛盾に誘わずにはおこななかったはずである。なぜなら、人間の存在の確立は、他人や世界(社会)に対する個人の

身体の投企を加えずに成り立たないからである。なるほど、思惟は能動的に他人や世界(社会)に働きかけることができる。しかし、他人や世界(社会)に対し身体はつねに受動的でしかない。この受動性を含んだ能動性という人間の矛盾をかかえて生きる個人(たとえば、シモーヌ・ヴェーユ)はまた、このような矛盾を自らの精神で知りつつも、それだからさらに、肉体労働を中心にした文明<sup>34)</sup>への展望を強調する(Ⅲ)の『自由と社会的抑圧との諸原因についての考察』にみられるとおり、身体を受け入れさせる改革された世界(社会)に向かわせるようにすれば、思惟なる能動性が深められるという強い願望がこめられた期待感を思惟に担わせていたのである。私はそのように、思惟に対する期待というものを推測する。ところが、現実の他人や世界(社会)が、思惟なる能動性と身体なる受動性を同時に受け入れるか、あるいは、どちらを受け入れるかどうかは、個人がその現実の真只中に身を置いて立ち向かうのでないかぎり、誰にも答を出せることではなかったのである。

シモーヌ・ヴェーユが(Ⅲ)を脱稿したあとで、すぐさま、工場労働者になったのは、世界(社会=工場)を前にして、世界が彼女をして無関係といわせた思惟と身体にもいかに決着をつけずか自前で捉えることが課せられたからだ。そういう意味では、工場体験がひとつの実験になってくるといえよう。工場体験における現実、(Ⅲ)の引用として取り上げた文章、つまり、彼女の思惟に対する期待をことごとくに裏切る結果しかもたらさなかったのである。〈身体の非理性的な反射〉に従わざるを得ない状況に置かれて、〈非人間的〉、〈奴隷〉になったし、〈思惟の能力の行使を強制〉させられたり、自らの〈思惟の統御〉を取り上げられるばかりか、放棄させられてしまったのだ。それどころか、思惟が空化する経験をもったのである<sup>35)</sup>。あれほど思惟に期待をかけたつも、現実(他人や世界)が思惟を否定したのだということである。思惟が空化されたことは、同時に、精神自体の空化につながってくる。したがって、そこには、感情<sup>36)</sup>をはじめとする精神の諸能力さえ失われてしまう現象が彼女に生み出されると捉えるべきである。しかし、それでも、彼女は依然過重な労働を続けなければならない。そうすると、精神が一種のものになろうが、身体のみが動かされるしかない状況が作り出されるということになる。つまり、世界(社会=工場)では、身体を動かす

だけがすべてなのである（これは身体が能動性に変ったことを示唆するのではない。身体＝受動性をそなえた精神＝能動性として個人が世界に存在しようとするとき、身体は世界からの働きかけを及ぼされるために、世界に能動的に作用する精神＝思惟とは、個人の思惟と身体が無関係を形成するがごとき関係を導き出せるのであるが、この精神の現実の空化にあって、身体は一層の世界苦を引き受けるものに位置してくる。しかし、そのことは逆説になるが、身体がまさしく世界を捉えたことを意味させるのだ）。その場合、手足などの表面的な身体部分の動きは、精神の空化ゆえに、もはや自らの精神の指令によって従わされるのでは絶対ない。たとえば、それは、工場長の命令がおそらく、その手足自体を自動的に動かさせたり、あるいは、労働が身体に覚えさせた動きであったりするしかないように思われる。しかしながら、私のいう身体の運動とは、この表面的な身体部分が語るものと相違するのである。私がここでいいたいのは身体内部の活動についてなのである。この活動を、私は感受性と名付けるのである。

この感受性は *sensibilité* の訳語である。三作品では同じ *sensibilité* を感性と訳し (*sensibilité passive* は受動的感性＝思惟に取り込まれる感性と訳す)、こうした訳語におけるそれらの作用と区別したわけであるが、しかし、感受性は実のところ、工場体験以後の諸作品に出る単語と捉え得るのである。そうであるなら、今回の拙論のタイトルにどうしてこの感受性が書き添えられたか。まず、タイトルの意味は、「シモーヌ・ヴェーユの三作品における精神的能力」と「感受性」として分けて理解するところにある。そして、工場体験以後の諸作品を検討もせず、こうした感受性を語ることは危険であるかもしれないが、それでも感受性の名をタイトルに書き込ませるのは、私が三作品に持ち込んだ心身論的な視点を完全に明らかにしておかなければならないという意図があったからである。そのためには、身体から精神へのかかわりがどうなのかを解明することが不可欠な条件となってくる。工場体験で、シモーヌ・ヴェーユの精神が空化してしまったということは、精神から身体へのかかわりによってもたらされたのでは決してなく、身体が精神に影響を及ぼした結果なのである（これも身体の能動性を示唆するのではない。個人にあって、身体と精神＝思惟とが無関係であることは前にみたとおりであるが、それ

それがまた受動的とか能動的とかいわれるようなことはないということだ。そう捉えられるのはその関係と世界に対しての場合だけである）。たとえば、極度の疲労によって、精神は空化させられるのである。そして、この身体の精神に影響を及ぼす活動的な能力を、私は感受性としてみるわけである。それゆえ、その結果、この感受性の単語が三作品に見当たらないのは事実にしても、感受性を暗示させるかのようにした工場体験が後日にやってくるのだから、三作品にこうした感受性にかかわる彼女の心身論的な見解が見出されるならば<sup>37)</sup>、三作品ばかりか、工場体験までが、私のいう心身論的な視点をとおらせてみることでさえいい得るものになるのである。早速、三作品に立ち戻る必要がある。そうすると、彼女の次のような文章が目についてくるのである。

(I) 人間の身体とは、精神にとってはいわば世界を捉えて触ってみるためのピンセットのようなものだ<sup>38)</sup>。

(II) 精神と身体との調和的な合一に応じて、神と世界との調和的な合一も認められる<sup>39)</sup>。

(III) 思惟と身体とのすべての能力を行動に移すことなしに、何物をも獲得し得ない<sup>40)</sup>。

この引用文によっても、当然、シモーヌ・ヴェーユを捉えるうえで、精神と身体との関係を無視するわけにはいかないということが明らかになる（これまでの経緯から、(III)の引用文の〈思惟〉は精神と置換してもかまわないし、事実、そうあるべきである。なぜなら、〈思惟〉は精神の〈すべての能力〉のひとつであるからだ。また、〈身体すべての能力〉のひとつに感受性が相当するというわけであり、〈何物〉のうちには神のことも含まれてくるように思われる）。しかも、そうした関係はたんに精神から身体への関係をいうばかりではなく、身体から精神への関係もあるとして、それら引用文を理解しておかなければならない。その二つの関係を含んだ精神と身体との関係は、現実の工場体験のなかで、身体から精神への関係しか見出されないものになってしまったのである。精神から身体に関与させる感情は思惟の空化によって、精神に生起されることができず、身体に伝わるのが不可能にな

る。しかし、身体から精神への関係において、身体の精神への影響を捉えておかないかぎり、その思惟（精神）を空化させる原因がどこにも求められないことになるのだ。それゆえ、身体が精神に作用するといえるのである。作用（活動）とはその精神を変化させるものでなくてはならない。そして、こうしたことにも、感受性が該当させられるとみることができる。そうでなければ、思惟（精神）の空化にあって、まず、彼女が後年、『ノート』に「感受性のなかの真空こそ、感受性以上に運ぶ」<sup>41</sup>と書き記すこと自体が、次に、この引用文は何を意味させたいかが、そして、その〈感受性以上に運ぶ〉作用という〈感受性〉のことが、まったく理解できなくなるのである（また、〈感受性〉の作用（変化）である〈感受性以上に運ぶ〉とは何を示唆するのか。これは、彼女が神に出会う条件となっているように思われる。〈感受性〉が精神にその空化（真空）を生起させるがごとく伝えられると、〈感受性以上〉になると引用文を解釈し得るが、〈感受性以上〉は、もはや精神（魂）の自然的な能力ではなく（精神が空化しているから当然である）、魂の超自然的な能力をさしていわれる言葉なのだ。それゆえ、精神の空化を経る状態において、精神は超自然的な魂に移行されるのである。ただ、これ以上のことは、また別の機会に検討するということにしておき、ここでは少し、注意すべき点を添えるだけにとどめたい。それは、超自然的なことは未知のものであり、概念をもって表現できないということである。したがって、彼女は〈感受性以上〉としか記せなかったのではなかろうか。むろん、ノートに書きつけている彼女にとって、自分の精神がそのとき、超自然的な魂の状態にあったとみなすことができないのは、いうまでもないことなのである。しかし、〈感受性以上〉は〈感受性〉に関係し、〈感受性〉から生じることだけは確かである。さらに、注意すべきことは、上記の内容から、〈感受性〉が精神の能力であると誤解してはならない点である。〈感受性〉は何より先に身体に生起し、次に精神に伝わる能力であるとみておかなければならない。また、〈感受性〉は、精神を空化させる原因をかたちづくるが、その場合だけに生み出されるのではないことも知っておく必要がある）。そういうわけだから、この引用文註41の *sensibilité* は絶対、感性と訳すべきではない。精神上の能力として捉えられる感性は、精神を空化（真空）させることにはならない。感性が精

神を空化させるのでないことは、感性が外部的な印象を精神に刺激・反射としてそのままに伝えられるからである。いいかえると、かりに感性が精神の空化をつくることになると、その刺激は受け入れられるにしても、そのままには決して反射されないからである。感性がもし知覚部分で感情を構成するならば、それは、精神の空化とはいえなくなるのである。

ところで、私は、シモーヌ・ヴェーユにおける新しい問題を提起する意図をもって、この感受性を取り上げてきたということが出来る<sup>42</sup>。この感受性こそ、その展開いかんでは、前述もしたように、彼女が神に出会うところに導き入れるのではないかと予測し得るのである。その感受性のことを今後さらに考察する準備段階として、私は今回、感受性の位置づけを試みてきたつもりである。ただ、これまで語ってきたなかでの未解決な問題点、すなわち、感受性なる作用が果たして確かめ得るか、感受性が身体内部から生起し、本当に精神に影響を及ぼすのかどうか、あわせて、感情が身体に伝わる証明をなし得るかの諸問題が残っていたことに気づかされている。しかし、これらのことがもし解明されるならば、私の主張は、少なくとも間違っていないことが明かされようというものである。そこで、私は、それらの解明の鍵を今日の心理学や生理学の知識<sup>43</sup>に託してみようと思っているのである。まず彼女が語る次のような文章に注目しておくことが必要である。

わたしたちが排除することのできない神秘の源泉は、ほかならぬわたしたち自身の身体である。生命現象の極端な複雑さは、おそらく徐々に、少なくともある程度は、はつきりさせられるにちがいない。しかし、わたしたちの思惟をわたしたちの身体運動に結びつける直接的関係は、永久に不可解な闇に包まれるだろう。この領域において、わたしたちは仲介する連鎖を明確にできないために、わたしたちは何らの必然性をも理解し得ない。おまけに、人間の思惟が作り上げるような必然性の観念は、まさしく、物質にしか適用されないものである（傍点筆者）<sup>44</sup>。

この『自由と社会的抑圧との諸原因についての考察』の一文で触れてあることは、主に思惟と身体についてである。それは、すでに註19以下に検討した

ことであり、また、註46で語ることになるが、この時点ではもはや解決すべき緊急な問題にはなっていないのだ。それより、シモーヌ・ヴェーユの生きていた時代に、どれだけ科学（心理学、生理学、あるいは医学）が進歩し（のちに説明を加える）、そして、どの程度彼女がそれに着目していたか知る術がないにしても、注目してよいことは、その洞察力がさすがに鋭いという印象を、私がとくに傍点部分にもち得るところにある（仲介する連鎖とは神経を暗示するのではなからうか）。現代にあってなら、誰でもそのような予想を立てると人はいうかもしれないが、しかし、思惟と身体との無関係さを打ち出し、その原因を神経に求めようとするに至るまで人は言及するのであろうか。門外漢は、こうした科学に目を向けていないかぎり、そこまで立ち入れないはずである。それだけではなく、彼女はその科学にかなり精通してもいたのである。

いかにせん、今日でもそうした科学は進歩の途上であるといわれる。精神や身体のすべてが明かされたというのでは決してない。しかし、近代医学よりも数段進歩し、その加速度は近代医学の恩恵を受けたであろうシモーヌ・ヴェーユの時代の比ではないとみることができる。それでは、その進歩というものはどのような点にあるといえるのだろうか。私の考察しようとする範囲で少し語ってみなければならぬ。パスツールやコッホに代表される、19世紀初頭以来の医学は近代医学と呼ばれ、彼らの化学的薬剤の発見、あるいは、手術の方法の導入によって、身体の治療技術が一段と進歩したということである。その結果、私たちの目の前から、感染症が確実に減少していくことになるが、しかし、近代医学は、そのためでもあろうか、たんに身体患部に薬剤を投入させるか、患部を除去するだけでよいとし、身体のみを偏重する傾向をつくり上げてしまったのである。それゆえ、そこでは、人間の精神（心）が問われてこないということが問題になるわけである。ただし、それ以降の、フロイト（1856年—1939年）の精神分析、脳生理学、バヴロフ（1849年—1936年）の条件反射理論、セリエ（1907年—1982年）のストレス学説；深層心理学（心理療法）などによって、近代医学で顧みられなかったこの点が補われたということである。

ところで、近代医学以後のこれらの科学が補ったこととは何か。それはいうまでもなく、人間の精神（心）を無視することをせずに、身体を捉えようとしたこと

である。いいかえると、心身の相関性を確保させることにおいて、それらの科学は、成立したということなのだ。さらに、今世紀中葉には精神身体医学も登場するのであるが、しかし、この科学の誕生が時代に期待されるほど変化してしまった社会情勢を抜きにして語れない方にこそ、問題があるように思われる<sup>45)</sup>。しかし、私は今、その問題には立ち入らないことにする。私が問題にしたいのは、心身を相関させるものとして、これらの科学は何をテーマにしたかということにある。そして、そこに私の主張が符合してくる。なぜなら、精神と身体とは密接に関係することが、私の主張のひとつであり（このことはシモーヌ・ヴェーユも認めることである）、さらに、この精神と身体を関連づけさせるのは、彼女もいうように、思惟という能力にあるのではなく<sup>46)</sup>、感情であり、感受性であるときたことが、私の主張のひとつだからである（このことはまた彼女も認めるとしておく）。それゆえ私たちは科学も感情や感受性のことを問題にしているならば、この能力の存在を否定できないのだ。ひとまずそのとおりだといっておこう。とりわけ感情がこれらの科学で取り上げられるようになったのは、註45に記しておいたごとく、精神的ストレスなる心理因子（怒り、恐れ、不安など）がどのようにして身体に影響を及ぼすか探ることに見出されたのだ。今日的といえる精神身体医学<sup>47)</sup>は、それらの科学のなかで、とくに、バヴロフの条件反射理論（彼女はこれにかなり言及している。「哲学講義」参照のこと）、セリエのストレス学説；深層心理学（心理療法）を土台にして成り立っているといわれるから、とりわけ感情が問われること、いいかえると、精神的ストレスなる心理因子が問題になることを説明するために、それら三つの科学がどういふものであるかについて語っておかなければならぬのである。

まず、条件反射とは、動物が食物を期待するだけで唾液を分泌させることであり、そのことは、大脳皮質への感情の刺激が原因して、自律系の機能とのあいだに結びつきを形成することを意味してくる。次に、ストレス学説とは、心理的刺激（ストレッサー→ストレス）が自律神経に作用し、さらに内臓に含まれる内分泌腺（ここでホルモンが代謝される）の生理的機能に影響を及ぼすことを示すものである。そして、深層心理学（心理療法）とは、脳の皮質下（大脳以外の脳）のメカニズムの研究成果によって、情動が自律神経の

作用と深くかわり、内臓に影響を及ぼすことを明らかにしたものである。

以上、精神身体医学の成立に主に役立ったといわれる条件反射理論、ストレス学説、深層心理学（心理療法）について、簡単な内容を示したが、ここからも知り得るように、何よりもまず、精神と身体が関係を保有していないとは、もはや絶対いえなくなったのである。条件反射では、精神とは大脳（皮質）、身体とは耳下腺、顎下腺、舌下腺（これらは内臓そのものといえないにしても、身体内部にあるものだし、また、自律的機能を有するものである）、ストレス学説では、精神とは大脳（先の説明では大脳と記されないが、後述によって知るところとなろう）、身体とは内臓、深層心理学（心理療法）では、精神とは大脳以外の脳、すなわち、間脳、身体とは内臓をさすことになる。そして、注意しておきたいことは、この精神と身体の間関係をつかさどる能力が感情、情動以外に見当たらないということなのである（ここにはまだ、感受性のことが問われてこない。この能力を明らかにすることが、のちに解説の必要性がある私の課題となるのだ）。しかし、なぜ感情、情動なのか。前段の諸説を振り返り情動と明確に記される深層心理学（心理療法）の場合を除いて考えてみても、なぜ感情といえるのか。それに該当すると思われるのは、条件反射の説明事項でいえば、「期待する」ことであり、ストレス学説の説明事項でみると、「心理的刺激」である。それぞれ、願望（欲望）、怒り（恐れ、不安など）という感情でしかないのだ（感情と情動とは、前号でも扱ったように感情のさらに強い、あるいは激しいものが情動という関係をつくっているし、情念はまた、情動よりさらにもっと強い、激しい感情になるというわけである）。

ところで、これから、感情が身体（内臓）にどのようにして伝わるかという、ひとつ目の懸案を処理していくことにおいて、私は、ある問題をさらに提示しておかなければならない。それは脳の問題であり、神経の問題でもあるのだ。つまり、条件反射などについて説明した際に、そこに共通して出てくる大脳（皮質）とか、自律神経とかいう問題である。まず、脳における問題（当然この拙論に関連する事項のみにかぎられる）の私の見解から語る必要がある。これはまた、シモーヌ・ヴェーユの見解であり、脳生理学<sup>40</sup>の見解でもあり得る。そして、いうまでもなく、条件反射理論、ストレス学説、深層心理学（心理療法）の立場も

これに従うのである。どうということかという、脳は身体の一部であるとともに、精神の部位であることは確かであるが、私の見方は脳をつねに精神とみなしておくことにあるということなのだ。脳を精神と捉える、このことは、シモーヌ・ヴェーユの場合、すでに記した引用文註19（以下）から読み取ることができる。そこには、〈生ける身体の反射は、ときには、思惟とは完全に無関係である。…より多くの場合、生ける身体の反射は、精神が欲したことを、精神がそこにまったく参加することなしに遂行する〉と書かれ、一見、精神（思惟）と身体が無関係であると語られるがしかし他方で、彼女は感情あるいは感受性（ただし、後者の能力に関しては、今回の拙論の段階では、感受性がまだ私の先見に立っているものであることを断っておく）が精神と身体の間関係を保持するとみているのだから、そのことをこれ以上言及しないにしても、この引用文は、脳を精神と捉えようと試みるここでの観点では、完全に合致している。すなわち、精神と身体が関係すると理解されるうえで、その引用文に脳という言葉は決して見当たらないが、脳を〈精神〉と認めずに、〈生ける身体〉とみることはどうしてもできないことなのである。また、脳生理学が、脳は身体全体の機能をつかさどる中枢に位置するとともに、精神の中枢でもあるという立場に立っているがゆえに、脳を精神とみるということは、もはや決定事項であるといえるのである。

さて、私が脳というとき、むろん、それは頭脳をさす言葉、延髄、小脳、橋、中脳、間脳、大脳などを含み代表させて使用する言葉なのである。そして、以下で感情、あるいは感受性を問うために、条件反射理論、ストレス学説、深層心理学（心理療法）の説明に主に出た大脳や間脳について、あるいは神経について、最小限の解説だけはしておく必要があると思うのである。

大脳の表面（外層）は大脳皮質といわれ、そこには神経細胞が集中する多くの中枢神経がある。しかし、たとえば、この大脳皮質の中枢神経に起因するであろう思惟、意志、創造、判断、記憶の能力などは、実はその中枢神経だけで生起するばかりではなく、ときには、皮質下（大脳皮質を除いた脳の部分としての、前記した小脳、中脳、間脳などをさす）と結びつく場合もあり得るということだ。したがって、たとえば、大脳皮質における感情の反射によって、大脳皮質が皮質

下とつながること、つまり、この皮質下の末梢神経（大脳皮質の中樞神経から出入りする神経線維）が刺激されるような影響を受けるのである。ところが、皮質下の末梢神経は自律神経ともいわれ、内臓に関係させることも可能にするのだ。ということは、刺激の強弱に因ると思われるが、それが、大脳皮質において、また皮質下において反射されて、感情また情動が生まれる場合と、感情なる作用が心理的刺激になって、皮質下を通過し内臓にまで反射される場合に区別し得るとひとまず想定しよう<sup>49</sup>。そうだとすると、後者、つまり、自律神経に因る内臓（たとえば心臓あるいは胃など）の作用にあっては、その感情の働きに任せられることが絶対不可能になる。いかえると、心理的刺激を受けても、自律神経に支配される内臓は、意識下のレベルで処理するくらいは無意識作用を営むといつてよいのである。

ところで、私たち人間や動物には、二つの伝達系があるといわれている。ひとつは必ずしもがなの神経伝達系であり、もうひとつが内分泌伝達系なのである。まず、神経伝達系のことだが、これにはすでに前段において、神経細胞が集中するところの中樞神経、この中樞神経から出入りする神経線維のことを末梢神経というともたものが相当してくる。しかし、その末梢神経に関して、何しろ中樞神経から出入りしているということであるから、さらに細かい説明を試みざるを得なくするのである。つまり、末梢神経は、大脳皮質からも信号が送り出される（出る方）ことをさしていわゆる遠心性神経線維（指令神経）、大脳皮質にも信号が送り込まれる（入る方）ことをさしていわゆる求心性神経線維（情報神経）との作用を含んでいるということである。そして、前者の遠心性神経線維（指令神経）が内臓に達する場合をとくに自律神経といい、筋肉に達する場合をとくに体性神経というのであり、後者の求心性神経線維（情報神経）が感覚器につながっているということだ。他方、内分泌伝達系とは、ホルモンが伝達されることをさす。ホルモンは内臓に含まれる内分泌腺を出所にしており、この内分泌腺にはまた、遠心性神経線維（自律神経）が到達するとみられている。したがって、内分泌腺は自律神経の影響を受けるときもあるはずだ。いかえると、内分泌腺（ホルモン）は自律神経機能を活性化させる作用をもつということである<sup>50</sup>。

そして、間脳は、深層心理学（心理療法）がとくに

1950年代以降に皮質下の脳を問題にした際に、取り上げられてきたものであるといわれている。この間脳について注意すべき点は、そこにも、大脳皮質と同様に中樞神経があるということ、しかし、その中樞神経が情動作用を促すことで、大脳皮質のそれとは異なっているということなのである（大脳皮質には多くの中樞神経があると前記したが、代表的な中樞神経をここに取り出すなら、感覚中樞神経、運動中樞神経、言語中樞神経などがあるということだろう。また、思惟、意志、創造、判断、記憶、そして、これからようやく語ることでできそうな感情は、どちらかといえば、運動中樞神経から生起させられる能力になるということなのだ。これはたんに身体を動かす運動でなく、再構成の意味を含む運動中樞神経である）。しかも、間脳の中樞神経にも、中樞神経がゆえに、大脳皮質のそれから出入りする末梢神経があるのと同様、末梢神経が接続するわけだから、情動は遠心性神経線維、つまり、内臓に結びつくところの自律神経と関係を保持する場合もあるということになる（むろん、この遠心性神経線維は筋肉につながっていわゆる体性神経にもなり得るが、これは拙論を展開するうえでかわりをもたないので、これ以上の言及はしないつもりである）。いかえると、情動は自律神経の作用と深く関係し、自律系の機能である内臓に影響を及ぼしてくるということである。

間脳に発生部位をもつ情動を、私は先に感情のさらに強い（激しい）能力とみておいた<sup>51</sup>。それでは、感情はどのように捉えられるべきなのか、情動と比較させて語ることからはじめてみようと思う。まず、前段に少し記しておいたが、感情は脳のなかの大脳皮質とかわるということ、したがって、感情の働きは意識に関係するとみなされるのである。これに反して、繰返すが、情動は脳の皮質下に組み入れられる間脳とかわるということ、したがって、情動の働きはそれが意識作用を受けることのない無意識的なものにならざるを得ないのだ。そうすると、同じ脳（精神）といわれながら、感情と情動の働き（意識作用とみなされる感情と無意識作用とみなされる情動）の相違はどこからくるというのか。脳のなかでも、大脳皮質がその表面数ミリの部分をさし、間脳がその大脳皮質下にあるということは、それらの脳の位置を異ならせることであり、その結果、両方にあるとされる中樞神経の質をも相違させることになるのである。大脳皮質の中樞神経

経はもっぱら意識作用を促すということだから、そこを発生部位にする感情は感情という意識作用をなすしかなないのであり、間脳の中樞神経はもっぱら身体の代謝・栄養・排泄などの無意識作用を促すことにかかわるということだから、そこを発生部位にする情動はその影響を受けて、情動という無意識作用に従うしかなくなるのである。情動は生理的表出と変化を伴うものである。したがって、たとえ大脳皮質や間脳の両方から、それぞれ、遠心性神経線維（自律神経）が出て内臓に接続していたにしても、感情と情動のどちらが内臓と強く関係してくるかは、もはや歴然としているのである。内臓は前記もしているように、無意識作用を営むわけだから、情動の方こそ、間脳の中樞神経を発生部位にするだけ、内臓と強く結びついているということだ。しかし、感情の方は、それが遠心性神経線維（自律神経）に伝達させるにせよ、強い（激しい）感情、つまり情動ではなくて、いわばたんなる感情のために、感情が内臓に到達しようその途中で中断されたり、あるいは、感情という意識作用が内臓の無意識作用に吸収・処理されて、内臓に完全に伝わらなくなるのではないかと予想できるのである。つまり、たんなる感情は内臓にまで到達しない。いいかえると、この感情は大脳皮質における意識だけの刺激・反射にとどまってしまうということである。そして、こうしたことは結局、遠心性神経線維（自律神経）が大脳皮質の中樞神経につながるだけで、皮質下の間脳に立ち寄りずに、直接内臓に接続されるところに原因が見出されてくると捉えておくべきなのである。それゆえ、大脳皮質から間脳を経由しない遠心性神経線維（自律神経）は、それ自身を現に内臓に接続させているのであるが、実質的に感情なる信号を意識作用にのみとどまらせ、何ら内臓に関係させることがないといえるのだ。

それでは、感情が精神と身体を関係させるとみたことは否定されなければならないのか。決してそうではない。なぜなら、遠心性神経線維（自律神経）が大脳皮質と間脳のあいだを接続させて（あるいは、大脳皮質から間脳を経由して）、内臓に達する場合があるということを、前段より予想し得るからである。大脳皮質が遠心性神経線維によって間脳につながりさえすれば、間脳からはいうまでもなく、すでに内臓に接続される遠心性神経線維が出ているわけだから、大脳皮質または間脳（精神）と内臓（身体）が関係を保有

することになり、大脳皮質に生起する感情が内臓に途切れることなく伝わっていくのである。ただ、大脳皮質と間脳のあいだでの感情は、意識作用としての感情であるが、間脳と内臓のあいだでの感情は、無意識作用としての感情になる。というのは、感情が間脳をひとたび通過すれば、生理的表出や変化を伴う無意識作用の影響を、その感情は受けずにおれないからである（しかし、大脳皮質の関与する脳がなぜ間脳なのかといえば、後者には情動が生起するからである。大脳皮質における感情とこの情動は、前述したところからも、どれくらいの強さや激しさ、また生理的表出や変化をもって区別させられるか明確に知ることができないが、たとえたんなる感情だとて、情動とまったく質の異なるものでないのなら、他方で、内臓にもかかわらせ得る間脳と関係するしかなくなるということであろうか）。たとえば、感情が大脳皮質と間脳に関係する例として、私は、条件反射理論やストレス学説をみることができる。まず、前者において、食物を大脳皮質で期待（願望＝欲望＝感情）するだけで唾液を分泌させる動物の経過から、遠心性神経線維が内臓に関与させる間脳を通らずには、感情が唾液を生じさせることがないと理解するし（ただし、唾液を出す耳下腺などはむしろ内臓といえないだろうが）、後者にあつて、不安（感情）なるストレスが大脳皮質に生じ内臓に含まれる内分泌腺（ホルモン代謝）に異常もたらされるのは、内分泌腺に影響する遠心性神経線維が、大脳皮質から間脳に、間脳から内臓につながっているからだと思っている。

こうして、これまで、二種類の感情の伝わり方のあるということが判明したわけだが、私たちが問題にしている精神と身体の関係にあつては、感情が間脳を経由して内臓に結びつく場合の方を何より重視しておかなければならないのである。しかしながら、これが同時に意味させることは、感情が精神から身体に関連して語られよう心身の相関性を打ち出すことだけにあるということなのだ。つまり、大脳皮質や間脳から内臓に感情なる信号が送り出されて、精神と身体が関係するとみなされることにしすぎなかったのである。確かに、これは人間が心身合一をかたちづくる証のひとつになるが、しかし、その関係のみにおいて、心身の相関性が網羅されたとみることにほならない、そのすべてがいつくされたということには決してならないのだ。そこには身体から精神に関係する場合のこと

が含まれていなければならないと思うのである。しかし、このとき、精神から身体に関与させるのが感情であると指摘しておいたように、身体から精神に関係づける能力がなくてはならない。その能力として、感受性を適合させようと私は主張するわけである。と同時に、この提起によって、はじめて、精神と身体の関係のすべてが語りつくされるのだと確信できるのである。

しかし、この感受性について、私たちはとくに注目したりすることがほとんどないといってよい。あったにしても、それは外部的な印象を受け取る際によく使用する表現、たとえば、あの人は鋭い感受性の持主だといわれることくらいがせいぜいなのだ。ところが、身体に生じる能力のことで私のいう感受性とは、そのことだけを意味させるのではなく（この場合、私は感受性ではなく、感性という言葉をもちいた）、人間内部、つまり、人間の身体諸器官の活動（ないしは変化）をさす内容の方に重点が置かれる言葉であるということだ。（身体諸器官の活動あるいは変化とは主に内臓の働きを意味させる）。しかも、それは身体から精神にその信号を送り込んで、精神と身体とを合一させる能力となっているのである。それゆえ、やはり懸案としていた事項、すなわち、感受性なる作用が果たして確かめ得るか、あるいは、感受性が身体内部から生起し、本当に精神に影響を及ぼすのかどうかに答を出すうえで、早速に、この感受性について解き明かしていかなければならないが、しかし、それは、心理学的、生理学的知識を私なりに整理したのちに問うことになるはずである。

先に、私は末梢神経なるものに二作用があるとみておいたわけだが、これまでの説明においては、大脳皮質にしる、間脳にしる、そこには中枢神経と、それに接続する遠心性神経線維（指令神経）があるといったにすぎない（ただし、この遠心性神経線維は皮質下に位置して、大脳皮質とつながれる。つまり、大脳皮質という表層中に接続しているのではない）。したがって、これは、精神から身体に信号が伝達される場合をいい、両方の中枢神経から信号が〈出る〉ことを意味する。しかし、これでは末梢神経が〈中枢神経から出入りしている〉と前記したときの〈入る〉方の意味がここに出てこない。〈入る〉とは、この二つの脳のことにやはりかぎれば、大脳皮質にも、間脳にも信号が送り込まれることをいうしかないのである。したがっ

て、この場合は、身体から精神に信号が伝達されることを示すといえるのだ。それこそ求心性神経線維（情報神経）であり、大脳皮質、間脳のそれぞれと接続することになる。そして、この求心性神経線維の先には感覚器がついているとされ、当然のごとく、諸感覚（刺激）が求心性神経線維を通過し、大脳皮質や間脳に伝わっていくと解釈される。

ところで、大脳皮質における発信・受信、また間脳における発信、受信とは何んであったのか。まず、前者のことからみていくことにしよう。たとえば、タバコが切れたので買おうと大脳皮質が意志するとすれば、その信号が遠心性神経線維に中継され、筋肉が動くことになる。あるいは、感覚器（視聴覚など）の刺激が信号となって、求心性神経線維に送り込まれ、大脳皮質が周囲に危険がないかを判断したりする。これらのことは確かに、大脳皮質にある中枢神経のおかげで可能になる。しかし、大脳皮質にある中枢神経の信号の発信や受信において見出される人間的諸能力は、とくに受信のときであっても、身体自体の活動（変化）に導かれ生じるものでは決してないといえるのだ。大脳皮質での信号が遠心性神経線維に中継され伝えられたところの筋肉は、たんに大脳皮質の意志通りに従わされるだけであり（この場合、水泳選手が自分の身体を鍛える意志をもつがゆえに、強靱な筋力に変化させた例と同一に語れない）、他方、求心性神経線維を経由させて信号を大脳皮質に送り込ませる感覚器は、その信号をそのまま大脳皮質に伝えるだけだ（感覚器自体の変化ではなく、外部の変化をその都度、感覚器は捉える。また大脳皮質のなかに、危険信号が伝えられたとしても、大脳皮質自体が危険なのではなく、それを察知するのである）。したがって、大脳皮質の発信の場合、この意志をはじめとして、ほかの思惟、創造、判断、記憶をも生起させる大脳皮質と筋肉（あるいはすでに語った内臓）の関係、さらに、前述したような間脳を通過しない感情を生起させる大脳皮質と筋肉（あるいはすでに語った内臓）の関係をもって、心身の相関性を認めることができなくなるのである（ただし、身体の方は自律神経なる遠心性神経線維にかかわる内臓を中心にみているので、体性神経なる遠心性神経線維に關係する筋肉については、この場所と以下に記す間脳を問う場合にのみ語ることにした）。一方、大脳皮質の受信の際の大脳皮質と感覚器の関係の場合も上記と同様な結果しかもたらさない（むろん、身体

から思惟、意志、創造、判断、記憶、感情なる能力が生起させられるはずがないから、大脳皮質の受信において、心身の相関性はまったく成り立たないのである。

そうすると、間脳の場合はどうなるのか。間脳の発信の場合、そこを通過する感情、情動なる間脳の能力と筋肉（あるいはすでに語った内臓）の関係をもって心身の相関性を認めることが可能になる。しかし、それは繰返すが、精神から身体にというだけの相関性である。したがって、完璧な心身の相関性をみるには、間脳の受信の場合を待たなければならない。求心性神経線維は、感覚器から大脳皮質に信号を送り込むと先に記したが、大脳皮質には可能であっても、絶対、間脳にこの信号が送り込まれることはないように思われる（註52参照のこと）。大脳皮質と感覚器の関係が心身の相関性を意味させることになり得ないとそのときみればかりである。同じ精神内の脳でさえこうなのだ。それゆえ、身体から精神に関与させる能力がそれ以外にあるとみなし得るなら、私のいう感受性が該当させられないかぎり、ほかには何もないということになりかねない。この身体から精神に関与させる能力をかりに感受性と見立て、次のような引用文を参照してみよう。

求心性神経線維にも内臓からのものがある、それも自律神経に含める人もいるけれど、近頃は遠心性のものだけにこの名前を使い、求心性のものはたんに《内臓からの求心性神経》と呼ぶ傾向が強くなった<sup>53)</sup>。

〈求心性神経線維にも内臓からのものがある〉ということとは、まず、求心性神経線維が中枢神経に〈入る〉を意味するのだから、あるいは〈内臓から〉ということだから、中枢神経のある脳を指定してくるのであり精神と身体の関係をも規定するのである。つまり、前者において、これまで二つの脳しか検討してこなかったが、その二つの脳、すなわち、大脳皮質と間脳が中枢神経のある脳となり、後者において、その関係は身体から精神に関与させるという関係になる。とすれば次に、どのような能力が大脳皮質と間脳にかかわり、かつ、身体から精神に関与させるのか。内臓から関係を保有するとき、その能力は感受性でしかなくなるのであり、大脳皮質と間脳にとって、その感受性が伝達

されてこよう受信の場合となり得るのである。しかしながら、私がシモーヌ・ヴェーユの立場でこのことをみるなら、その中枢神経に〈入る〉という脳は、または身体から関与させられるという脳は、間脳でしかないといえるのだ。なぜかといえば、間脳は感受性が〈感受性以上〉になる能力を生起させるからである。大脳皮質に伝えられる感受性もまた、内臓に起因する能力であるが、感情（精神）の信号が内臓（身体）にとどき得ないことを先にみたのと同様に（ただし、この場合は精神から身体への感情の伝わり方の例であり、ここでみる身体から精神への感受性の伝達とは逆方向である）、内臓から大脳皮質にまで到達できずにいる能力になるか、あるいは、前号に触れておいたように、大脳皮質にとって、感情として捉えられる能力になるしかないのである（この場合、内臓と大脳皮質が間脳を経由させない求心性神経線維とつながっていることがその条件となるし、この能力はもはや無意識作用ではなく、意識作用としてあるとみるべきである）。感受性が〈感受性以上〉になるのは、内臓から間脳に入り込む求心性神経線維のある場合だけにかぎられてくる。間脳は、内臓の無意識的な恒常作用が絶えず伝わっているところである。しかし、シモーヌ・ヴェーユが体験するような肉体労働において、その恒常作用だけではない活動（変化＝感受性）が間脳に伝えられ、間脳（精神）は確実に変化させられてしまうということができるのである。それゆえ、私は、感受性なる能力の存在とその作用があることを認めるのであり、感受性が身体内部から生起し、精神に影響を及ぼすことを確信するのである。

## 註

- 1) 新潟大学教養部研究紀要（第17集、昭和61年12月）のこと。なお、『哲学講義』は厳密に言えば、シモーヌ・ヴェーユの手になるものではなく、講義ノートである。この講義録と『デカルトにおける科学と知覚』は前記紀要で一応の解説を試みたものであるが、今回、前と異なる引用文を使用し、私の主張を展開させるために用いた。
- 2) 次回にでも、私は同上紀要の第16集（昭和60年12月）の作図（B）と（C）を利用し、シモーヌ・ヴェーユの主な作品から、この心理的・生理的な単語を抽出し、それらに検討を加えていくつもりである。

- 3) Simone Weil 『Leçons de philosophie』 Union générale d'édition, p. 31
- 4) Ibid., p. 33
- 5) Ibid., p. 33
- 6) Ibid., p. 21
- 7) Ibid., p. 240
- 8) Simone Weil 『Science et perception dans Descartes』 (『Sur la science』) Gallimard のなかの sensibilité (感性) は, p. 71に2度, p. 88と p. 92に1度ずつ使用される。
- 9) Simone Weil 『Leçons de philosophie』 Union générale d'édition のなかの sensibilité (感性) は, p. 129, p. 237, p. 238, p. 240 のみ2度, p. 258, p. 259に使用される。
- 10) Simone Weil 『Science et perception dans Descartes』 (『Sur la science』) Gallimard, p. 59
- 11) Ibid., p. 77
- 12) Simone Weil 『Leçons de philosophie』 Union générale d'édition, p. 52
- 13) Simone Weil 『Science et perception dans Descartes』 (『Sur la science』) Gallimard, p. 70
- 14) Ibid., p. 60
- 15) Simone Weil 『Leçons de philosophie』 Union générale d'édition, p. 261
- 16) Ibid., p.p. 63-64 (この引用文中の二つの感情は, 前者が affection, 後者が sentiment の訳語である。)
- 17) Ibid., p. 269 (註10から17までは, 本文の思惟とかかわる精神的諸能力(想像, 記憶, 意志, 欲望, 夢想, 感覚, 情動, 情念)についての引用文である。このうち, 感覚が註10と11に, 想像が註11と12に, 意志(作用)が註13と14と15に, 感情が註16と17に, 一回かぎり使用の他の能力に較べれば, 多く出てくることになるが, これは同じ能力の例を並列させただけであって, まったく他意のないことである。)
- 18) Simone Weil 『Science et perception dans Descartes』 (『Sur la science』) Gallimard のなかの sensibilité passive (受動的感性) は, p. 84に一度使用されるだけである。
- 19) Simone Weil 『Réflexions sur les causes de la liberté et de l'oppression sociale』 (『Oppression et liberté』) Gallimard, p. 120

20) 近代初頭以来今日まで, 心身論として打ち出された説には, 次のようなものがあるという。すなわち, それは, 相互作用説(あるいは相制説) Interactionism, 随伴現象説(あるいは付帯現象説) Epiphenomenalism, 並行説 Parallelism, 心身同一説 Identity theory, 人格説 Person theory, 二重側面説 Double aspect theory などの諸説である。以下それらを簡単に説明する。

相互作用説は, 精神的現象は因果的に身体的現象に影響を及ぼすし, あるいはまた, 身体的現象は因果的に精神的現象に影響を及ぼすということ。

随伴現象説は, 身体的現象が精神的現象を惹起させることのみを認める, いいかえると, 精神が身体に影響することがないし, 因果的連関もまた, 身体的なものから精神的なものへの一方向だけに向かう因果関係を意味させるということ。

並行説は, 精神と身体が並行関係にあることを示す。並行関係ゆえに, 精神的現象と身体的現象は連関する。しかし, この連関は, 異なる精神と身体のために, 相互に因果的に作用するところに見出されるのではない。

心身同一説は, 精神的現象が身体的現象と同一であるということ。つまり, 精神的属性は身体的属性に還元し得るということ。

人格説は, 人格なるものを実体に見立て, 精神的現象も身体的現象も人格の属性になるということ。

二重側面説は, 人間を精神と身体との二つの側面(属性)をもつところの単一の実体とみなすのである。

シモーヌ・ヴェーユの心身論的見解がこれら諸説のどれかと同じになるか, まったく別なものになるかの答は, 今回の拙論のその基礎的段階では, また, この説明不足の感のある諸説の内容では, まだ時機尚早なのでさしひかえるが, 彼女の場合, 私見では, これら諸説とは相違する独自の心身論(的見解)になるのではないかと予測している。それゆえ, 何れその比較検討と彼女の心身論について整理する試みとが必要になってくるだろう。諸説説明は主に註43の『こころの哲学』による。

21) Simone Weil 『Sur la science』 のなかの

- 『Science et perception dans Descartes』は p.p. 10-99におさめられている。
- 22) Simone Weil 『Leçons de philosophie』は p.p. 17-305におさめられている。
- 23) Simone Weil 『Oppression et liberté』のなかの『Réflexions sur les causes de la liberté et de l'oppression sociale』は p.p. 57-162におさめられている。
- 24) Simone Weil 『Réflexions sur les causes de la liberté et de l'oppression sociale』(『Oppression et liberté』Gallimard, p. 130
- 25) Ibid., p.p. 116-117
- 26) Ibid., p. 115
- 27) Ibid., p. 159
- 28) Ibid., p. 116
- 29) Ibid., p. 130
- 30) Ibid., p. 117
- 31) Simone Weil 『Leçons de philosophie』Union générale d'édition, p. 64
- 32) Ibid., p. 20
- 33) Simone Weil 『Science et Perception dans Descartes』(『Sur la science』) Gallimard, p. 69
- 34) Simone Weil 『Réflexions sur les causes de la liberté et de l'oppression sociale』(『Oppression et liberté』) Gallimard, p. 137 に、本文に關した一節がある。すなわち、「もっとも完全に人間的な文明は、肉体労働が中心になり、最高の価値を構成するような文明であるだろう。…肉体労働が最高の価値になるのは、肉体労働が生産物との関係によってあるのではなく、肉体労働を実行する人間との関係によってあるのだ。…労働がすべての能力を完全に行使するために、あるいは、すぐれて人間的な行為を構成するために改革される文明から、どんなみごとな生命の充実感を期待し得ないだろうか」を参照のこと。
- 35) 思惟が空化するという動詞は *s'évader* である(名詞なら *évasion*)。ふつうこの訳語は「脱走する」とか「逃亡する」とかであるが、思惟が逃亡するという内容は少し弱いし、意味があまりよく出てこないの、あえて私訳を用いることにした。この言葉はシモーヌ・ヴェーユが工場体験をしたあとで、それを振り返った際に書かれたものである。すなわち、1941年か42年の『Expérience de la vie d'usine』(『工場生活の経験』) <『La condition ouvrière』(『労働の条件』) Gallimard> の p. 241にある言葉である。
- 36) (I)の『Science et perception dans Descartes』のなかで、*sentiment* は21回使用されている(p. 20(2), p. 50(7), p. 51(4), p. 53(2), p. 54(2), p. 57, p. 58, p. 61, p. 62)。
- (II)の『Leçons de philosophie』のなかで、*sentiment* は80回使用されている(p. 24(2), p. 30(3), p. 31(3), p. 32(2), p. 33(2), p. 40(5), p. 54(2), p. 55(5), p. 59(3), p. 64, p. 65, p. 68(2), p. 69(3), p. 71(2), p. 81, p. 97, p. 117, p. 120(2), p. 123, p. 177, p. 214, p. 215, p. 228, p. 235(2), p. 238, p. 241, p. 243(2), p. 250, p. 251, p. 252, p. 255(4), p. 256(2), p. 260, p. 266(6), p. 267(4), p. 269(3), p. 290(2), p. 301, p. 302(2))。また *affection* は p. 267(2), p. 268(2), p. 269の5回である。
- (III)の『Réflexions sur les causes de la liberté et de l'oppression sociale』のなかで、*sentiment* は11回使用されている(p. 57, p. 59, p. 109, p. 119, p. 128, p. 137, p. 139, p. 149, p. 153(2), p. 154)。このように、思惟(*pensée*)とあわせ考えるなら、三作品には心理的な単語が多いといえるのである。
- 37) 註34に記しているように、肉体労働こそが彼女の心身論的な見解につながってくると思われる。肉体労働は当然、身体に關しているの、身体に伴う〈すべての能力〉(註34)のうちひとつでも行使することができるならば、感受性なる能力のことが暗示されてきてよいというわけである。ただし、(III)の場合の肉体労働は理想的な考えに基づいたものであって、現実的な工場体験での肉体労働とは異なるだろう。しかし、後者の肉体労働によって、感受性が問われるのだから、前者の理想的肉体労働(そして肉体労働を中心にした文明観)は、工場体験以後の諸作品において、思想的に深められるような捉え直しを迫られてくるのである。したがって、この感受性なしには、後日の労働観、文明観が語れなくなるともみることが出来る(今後そのことをみる必要が私に生じてくるだろう)。それははともかく、この肉体労働については、(I)(II)より(III)に多く語られて

- いるが、(I)(II)に皆無なのではない。
- 38) Simone Weil 『Science et perception dans Descartes』(『Sur la science』) Gallimard, p. 86
- 39) Simone Weil 『Leçons de philosophie』 Union générale d'édition, p. 229
- 40) Simone Weil 『Réflexions sur les causes de la liberté et de l'oppression sociale』(『Oppression et liberté』) Gallimard, p. 117
- 41) Simone Weil 『Cahiers II』 Plon, p. 129 (これはまた、『La pesanteur et la grâce』(『重力と恩寵』)のタイトルとして、ギュスターヴ・テイボンがこの『ノート』より抜粋し刊行した p. 33に記されている。この『ノート』は1940年以降、彼女が書き綴ったものである。)
- 42) シモーヌ・ヴェーユ研究を心身論的な視点で捉えることに当たっては、たとえば註20の哲学的考察や心理学・生理学的考察が必要になっているのではないと思われる。彼女自身も心理学(あるいは生理学まで含める——しかし、現代のそれらに較べ、その知識獲得には限界があったはずである)に、かなり精通していたということであるから(彼女は哲学者である)、なおさらの感を抱くのである。ただ、この研究分野は新しいので(筆者だけがそうみているのみかもしれない)、残念ながら、筆者が調べたかぎりでは、シモーヌ・ヴェーユの内外の研究者の書に参考となる資料が現在のところ、ないというのが実情である。それゆえ、筆者独自の方法によって、先頭に立ってやらなければならないと考えているのである。なお、この論稿は、感受性試論〔II〕に位置するものである。
- 43) 以下に今回の拙論に利用した心理学・生理学書を掲げておく。
- 『行動と脳』今村護郎(東京大学出版会)、  
『精神としての身体』市川 浩(勁草書房)、  
『〈身〉の構造』市川 浩(青土社)、  
『脳』千葉康則(NHKブックス)、  
『脳と現代』千葉康則(法政大学出版局)、  
『脳と心を考える』井上英二他(講談社)、  
『身体と心のしくみ』本間三郎他(朝倉書店)、  
『心と身体』坂本百大(岩波書店)、  
『身体』湯浅泰雄(創文社)、  
『身体から精神への架橋』湯浅泰雄他(青土社)、
- 『感情と人間関係の心理』齊藤勇他(川島書店)、  
『身体と感情の現象学』ヘルマン・シュミッツ、  
小川侃他訳(産業図書)、  
『意識の生理学』ポール・ショジャール、吉岡修一郎訳(白水社、クセジュ)、  
『情念とはなにか』ジェローム・アントワーズ、  
菅野昭正訳(白水社、クセジュ)、  
『精神身体医学』ポール・ショジャール、吉倉範光訳(白水社、クセジュ)、  
『講座 現代思考心理学』1. 2. 3. 滝沢武久他(明治図書)  
『こころの哲学』ジェローム・A・シャッフアー、  
清水義夫訳(培風館)、  
『「心一身」の問題』山本信他(産業図書)  
『感性の覚醒』中村雄二郎(岩波書店)  
『共通感覚論』中村雄二郎(岩波現代選書)など。
- 44) Simone Weil 『Réflexions sur les causes de la liberté et de l'oppression sociale』(『Oppression et liberté』) Gallimard, p.p. 119-120
- 45) 精神身体医学(Psychosomatic medicine)はふつう心身医学と呼ばれている。心身医学のきざしはすでに古代ギリシア時代の医学にあったといわれるが、ようやくにして、1930年代のドイツではじめて唱えられることになり、1940年代にかけてアメリカに広まって脚光を浴びたのである。そうになったのは、やはり、社会情勢がかつてないほどの高度に機械化され技術化されたものに変貌してしまい、私たちが多様化する価値観を目の当たりにして迷い、あるいは、人間疎外を感じ、生きがいを喪失するからである。このような精神的ストレスに襲われる結果、成人病(高血圧、動脈硬化、心臓病、腎臓病、癌、リウマチなど)、消化性潰瘍(胃潰瘍、十二指腸潰瘍など)、気管支喘息から逃がれることができない。これらの病気は、近代医学で、治癒させることが不可能となる。なぜなら、近代医学における身体への薬剤投与、身体諸器官の異変部分の除去という外科的な治療によって、それらの病気が治ることがないからである。近代医学はまた、精神的ストレスなる心理因子(怒り、恐れ、不安など。これらは感情、情動である)がそれらの病気の症状の発生や経過において、身体疾患に密接に関与されてあることを不問にしていた(あるいは、たとえば、精神の病さ

え、近代医学では細菌か化学物質のような何らかの毒素によっておこるとし、そのことが究明されれば解決する病であるとみなされた)。しかしながら、心身医学にあっては、あたかも心身を合一させて捉えようとする全人的、総合的医療を試みるところにある。

- 46) たとえば、科学（今問題にする医学）についてみれば、科学は身体（物質）を対象にし、そのメカニズムを客観的な方法で系統的に研究（科学＝学問）する。しかし、科学する人は、自分の身体や自分の精神も科学的対象にしてはいないのだ。非自己的身体（物質）のメカニズムを解明するには、当然、科学する人の精神の働きがそこに要求されるだろう。しかし、この精神は、非自己的身体を対象とするかぎり、非自己的精神しか生み出さないものになる。このように、科学は科学する人の非自己的精神において、非自己的身体を言及するところにあるから、そこでは、自分の身体についてはむしろのこと、この自分の精神さえ問われることがなくなるというわけだ（科学において、身体＝物質のメカニズムを明らかにし得るのは、思惟する知性の能力のおかげだが、この知性で把握される身体は、自分の身体ではないし、自分の精神とのかかわりを意味させないということだ。見方をかえていうと、知性＝精神が身体（物質）を観察したつもりでも、その身体（物質）自体はそこに精神を欠かさせるかたちで現出するしかないということである。したがって、シモーヌ・ヴェーユが註44で、〈人間の思惟がつくり上げるような必然性の観念は、まさしく、物質にしか適用されない〉というようになる。つまり、思惟は非自己的身体（物質）にしか関係しないのだ。これでは、自己の思惟＝精神と身体とが関係するはずが完全でないといわれても他方がないのである）。ところが、人は、自分の精神を見出せない非自己的精神であるにせよ、それは、自分の身体（唯物論的な人間機械論的発想をする人にとって、脳さえ身体と捉える）を機能させた結果、獲得される精神ではなからうかと疑問をさしはさむだろう。つまり、自分の身体を使用する以上、そこに産み出されるのが非自己的精神であっても、自分の精神になり得るというだろう。しかし身体としての脳が思惟（精神＝知性）を生じさせ

るからといって、自分の精神と自分の身体が関係づけられることにはならないし、この思惟すら、この人がいう脳以外の身体諸器官とはまったく関係することができないのである。また、脳を精神とみなしたところで、シモーヌ・ヴェーユが註19にいうように、身体とはかかわらないのだ。

- 47) 精神身体医学の全人的、総合的医療とは、およそ、次のようなものになる。成人病、消化性潰瘍などの患者の特徴として、医師の面接や問診（患者の心身相関の病態への解明のための情報入手方法）に対し、患者は医師に事実をしつこく述べるだけで、そこには感情を伴わせないことが顕著になる。要するに、患者の感情や情動などの感知力とその表現力が不完全でしかないということになる。それゆえ、医師は患者の心理状態に対する感情などの能力を高めるように、その療法を行う。精神から身体へのアプローチ（心身療法）や、身体から精神へのアプローチ（身心療法）を試みさせるなかで、患者が、日常生活において、自らの問題点を整理・分析・解決し、リラックス、注意集中、精神の平静さを保持できる自律訓練法（自己統制法）を課しながら、回復をはからせるのが医師の仕事であり、かつ心身医学のなすことになる。それは、患者自身の自力によって、治療が可能になるのではなく、人の手助けが必要になるものである。そこから、こうした病気には、社会ということが必ず前面に押し出されてくる。なぜなら、たとえば、癌を告知するか否かにおいて、患者・家族・医師・看護婦などの人間関係（社会）が生じてくるからだ。
- 48) 脳生理学はまた、その成果のひとつとして怒り恐れ、不安などの感情、情動、情念がアドレナリン、ドーパミン、エンドルフィンといった化学物質の作用で脳幹部に影響することを主張している。
- 49) バゾフの条件反射の例がこのことに該当する。すなわち、食物を期待するだけで唾液を分泌させる動物の例は、大脳皮質への感情の刺激が原因して、耳下腺などの自律的機能とのあいだに結びつきがあったことを示唆するのである。
- 50) セリエのストレス学説がこのことに該当してくる。すなわち、ホルモン代謝に異常がもたらされ、自律神経が恒常的に働かなくなったことは、

心理的刺激(ストレッサー=ストレス)が自律神経に作用するだけでなく、さらに内臓器官の生理的機能をも破壊してしまうということを意味する。

- 51) この間脳が明らかになってきて、《驚き》《愛》《憎しみ》《喜び》《悲しみ》《欲望》を基本的な「情念」(情動よりさらにもっと強い、激しい感情)を視床下部に発すると見抜く、デカルトの見解の正当性は認められてくるはずである。なぜなら、間脳とは視床や視床下部によって構成されるものだからだ。それがデカルトの功罪の功のひとつであっても、罪といえる影響は今日までの世界、少なくともヨーロッパに根深く広がっているように思われる。「われ思う、故にわれ有り」の命題は、神・人間・自然というキリスト教における序列を打ち破る、つまり、われが有って、あるいはわれが思惟することによって、はじめて、神が問題になる(いいかえると、われがいなければ、神のことは問われない)ということは、これまでの人間が神のもとにある世界観を完全に覆すことになる。そして、この註とかかわる彼の思想に出会う。すなわち、「われ思う」という思惟(精神)と物体(身体)とは、別々の実体であるとする物心二元論である。これは、ギリシア、中世以来の形相と資料、霊と肉なる二元論に決着をつけた思想だといわれる。それゆえ、ヨーロッパはその昔から、アジアにおける禅(仏教)思想である「心身一如」にはなかったということである。この精神(思惟)においてのみ、物体を独立に扱う道が切り開かれる。物体を人間(精神)から冷たくつき放し、飼いや客体にしてしまう。それゆえ、科学が隆盛を極めてくるのだ。シモーヌ・ヴェーユも、デカルトと同様、思惟と身体とは無関係だとする立場をとる。しかし、彼女は同時に感情や感受性において、精神と身体との相関性をみる。「情念論」の情念こそ、デカルトにとっての心身の相関性を認めるかのような思想に位置するが、それを前面に打ち出すと、物心二元論は崩壊するしかなかったのである。シモーヌ・ヴェーユのいう心身合一は、おそらく、東洋思想に通じるものがある。精神と身体を結びつける感情や感受性こそ、「氣」ではなからうかと思っている。それはともかく、デカルトとシモーヌ・ヴェーユに

おけるこのような見解については、そのなかでも、物心二元論に対する批評などは、前号を参照されたい。

- 52) 感受性という言葉が適当でないなら、他の用語を充当させることが必要ではないかと考える。たとえば、現代生理学において、「内臓感覚」(内受容感覚)という言葉があって、内受容感覚とは身体の内部からの刺激を受け取る感覚のことであるとされる(『共通感覚論』中村雄二郎、岩波現代選書、p. p. 86-88)。しかし、これだけの文面では、内臓がたんに感覚を生起させることをいうのか、精神が受け取る感覚なのか明らかではないが、氏も心身論が「新しい知見との結びつきのなかで捉えなおさなければならぬだろう」(同書 p. 88)と語られるように、このような働きを科学(生理学など)や哲学においてさらに一考しないかぎり、どうしても身体から精神に信号が伝わる見方が失われてしまうように思われる(ただし、私のいう感受性と、たとえばこの内臓感覚のどこが同じでどう異なるかなどは今後に譲るしかないにしても、感受性は感覚でないのだから、決して同じ内容をもつものになるとは思えないとだけは、ここでいっておけるのでなかろうか)。本文にすでに語ったごとく、精神から身体にという心身の相関性があったとしても、これだけでは精神と身体は完全に合一されるとはいいたい。極論すると、身体が主になって、精神と合一しよう視床のことが重視されてよいのではないかということである。科学だけでなく、唯物論的な考えを含ませて捉え得るあらゆる哲学説(註20参照)は、たとえ精神と身体との関係を肯定しても、絶えず精神を主にしてみる方から、それらの関係を把握することにある。それゆえ、そこでは、身体の方から精神をみようとする、私の主張から提起し得るひとつの視点が欠如されているということなのだ。いいかえると、身体が精神をみるという、あるいは、精神としての身体(これは市川浩氏の著書タイトルと同じになってしまうが)というような見方をも私たちはもっていなければならないということなのだ。そうでないと、絶対に、完全なる心身合一が可能になることはないのである。
- 53) 『脳』千葉康則、NHKブックス、p. 38。